

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720121

研究課題名(和文) 第一次世界大戦勃発100周年のために：現代イギリスにおける大戦の記憶の行方

研究課題名(英文) For the Centenary of the Outbreak of the First World War: The Memory of the First World War in Contemporary Britain

研究代表者

霜鳥 慶邦 (Shimotori, Yoshikuni)

大阪大学・言語文化研究科(研究院)・准教授

研究者番号：10400582

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、第一次世界大戦勃発100周年という決定的瞬間にねらいを定め、現代イギリスにおける大戦の記憶のダイナミクス(継承、変容、断絶、再考)について学際的な考察を行った。具体的には、大戦体験者の回想録、詩、小説、メディア報道、映画、ミュージアム、記念碑、コメモレーション、ツーリズム、大戦100周年行事、国際情勢などを分野横断的に分析することで、大戦の記憶の現代的意義について明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study explored the dynamics of the memory of the First World War in contemporary Britain with a special focus on the critical moment of the centenary of the outbreak of the war. Through interdisciplinary researches in various fields (WWI veterans' memoirs, poems, novels, news, movies, museums, memorials, commemoration rituals, tourism, centenary events, international affairs, and etc.), the study clarified the significance of the memory of WWI in our age.

研究分野：イギリス文学

キーワード：第一次世界大戦 記憶 コメモレーション イギリス ベルギー ツーリズム ミュージアム 戦争

1. 研究開始当初の背景

本研究は、平成 18-20 年度科学研究費補助金(若手研究(B))の研究課題「第一次大戦(間)期英国文学・文化における第一次大戦後遺症の研究:身体・性認識を中心に」と、平成 21-23 年度科学研究費補助金(若手(B))の研究課題「20、21 世紀イギリス文学・文化における第一次大戦神話の系譜の研究」の発展的延長線上に位置する。2014 年の第一次世界大戦勃発 100 周年という決定的瞬間にねらいを定めて積み上げてきたこれまでの研究成果を踏まえて、いよいよ大戦勃発 100 周年を迎える現代イギリスにおいて、大戦の記憶がどのように継承・再考され変容するのかを、主に文学・文化研究の視座から明らかにしたいという動機に基づいている。

2. 研究の目的

本研究は、2014 年に第一次世界大戦勃発 100 周年という歴史的瞬間を迎えることになる現代イギリスにおいて、大戦の記憶がどのように継承・再考され変容するのかを分析し、さらに記憶の行方について考察することで、大戦の記憶の現代的意義を明らかにすることを目的とする。大戦 100 周年に向けて急速に展開するアカデミズム内外の動向をリアルタイムでフォローしながら、主にイギリス文学・文化研究の立場から、大戦の記憶の今日的現象の諸相とその意味を明らかにすることを目指す。次の 4 点が主要な研究目的となる。

(1) 大戦の記憶と文学

現代文学(小説、詩)における大戦の記憶の意味を明らかにすると同時に、現代の文脈における第一次大戦の戦争詩(主に Wilfred Owen)の受容と解釈と影響力について明らかにする。

(2) 「第一次大戦世代」不在の時代における大戦の記憶の特徴

第一次大戦を直接体験した世代が完全にこの世を去った 2009 年のイギリスの文学・文化現象を分析し、新たなステージへ移行した現代イギリスにおける大戦の記憶の特徴を明らかにする。

(3) イラク戦争・アフガニスタン戦争表象と第一次大戦の記憶との相互関係

第一次大戦における Wilfred Owen の言説的影響力の確認作業をふまえ、それがイラク戦争とアフガニスタン戦争などの現代戦争の表象にも多大な影響を与えている様子を明らかにする。

(4) 大戦の記憶とコメモレーション

ベルギーのイーペルに建つメニン・ゲートでの追悼儀式を主な考察対象として、現代における大戦の記憶とコメモレーションの関係について考察する。

3. 研究の方法

(1) 大戦期から現代までの大戦文学(小説、詩、回想録)や映画作品、音楽作品を入手し比較分析する。

(2) 第一次大戦研究の最新の文献資料を入手し、研究の動向と課題を把握する。特に従来のナショナルな枠での大戦理解からグローバルな枠へと展開する動向とその成果を把握する。

(3) 記憶とコメモレーションに関する理論的・実証的枠組みを構築する。

(4) インターネットを利用して第一次大戦勃発 100 周年に関する各国の最新の政治的・文化的動向に関する情報を入手・整理する。

(5) イギリス、ベルギー、フランス、ドイツにて、ミュージアム、記念碑、墓地、追悼儀式などを中心に現地調査を行い、第一次大戦に関する一次資料と大戦 100 周年をめぐる文化状況に関する資料を入手し、研究の実証性を強化する。

(6) 上記(1)-(5)を有機的に関連付けながら、大戦の記憶に関する学際的・総合的考察を目指す。

4. 研究成果

主に次の 4 つのテーマについての研究成果を上げた。いずれも、第一次大戦 100 周年の最新の状況と研究動向を踏まえた、今日的意義に満ちた内容であると確信している。この成果を踏まえて、引き続き大戦 100 周年の動きをリアルタイムで追いながら、研究を進展させていく予定である。

(1) 2009 年、第一次大戦での英国陸軍兵士の最後の生き残りであり、「最後のトミー」(the Last Tommy)と呼ばれた Harry Patch が他界することで、イギリスは「第一次世界大戦世代」不在の時代へと以降した。Patch の死は一時代の終わりを意味する象徴的出来事としてとらえられた。彼の死を追悼するさまざまな言説の中から、桂冠詩人 Carol Ann Duffy による追悼詩「Last Post」に注目した。この詩を同時代の文学・文化・社会・政治の言説と関連づけながら、さらに Wilfred Owen を中心とする戦争詩の伝統との関係に注目しながら分析することで、現代イギリスの大戦の記憶の次のような深層レベルの特徴を明らかにした。「第一次大戦世代」が去り、一時代の終わりを宣言したはずのイギリスに、大戦の悪夢的記憶は確実に憑依しており、その記憶はつねに不意打ち的に回帰する可能性に満ちている。(5. 主な発表論文等の〔雑誌論文〕(3)(4)を参照)

(2) 第一次大戦の記憶における D. H. Lawrence の位置についての考察を行った。まず大戦の記憶研究の古典的存在である Paul Fussell の著書を参照し、大戦が時間軸上の位置から遊離し普遍的な存在と化して 20 世紀の人々の意識に多大な影響を及ぼしたことを主張する彼の論が、大戦 100 周年を迎える今でも有効であることをいくつかの事例を挙げながら論証した。そして、大戦の記憶の普遍化と深く関係する重要な存在として、戦争詩人 Wilfred Owen に注目し、彼の詩のモチーフ(' pity of war ') が文学・政治・社会のレベルに浸透し、現代の人びとの戦争認識に強く影響している様子を確認した。このような戦争認識の枠組みにおける Lawrence の位置を確認するための一例として、戦争映画 *G I Jane* (1997 年) を取り上げた。この戦争映画の中に、本来は戦争とはまったく無関係の Lawrence の詩 ' Self-Pity ' が引用されている。この奇妙な現象が成立する最大の要因として、Owen 的モチーフ(' pity of war ') がこの映画に深く関与していること、そして Owen 的モチーフとの関係において Lawrence の詩が解釈されることで、Lawrence の詩が Owen 的モチーフと強烈に共鳴し、結果的に「戦争」詩として解釈可能なテキストと化すことを指摘した。以上の議論を通して、Owenism と呼ぶべき戦争認識パラダイムの影響力を明らかにし、Lawrence の詩がそのパラダイムに取り込まれていく様子を明らかにした。(5. 主な発表論文等の〔学会発表〕(3)を参照)

(3) 第一次大戦勃発 100 周年を迎えたイギリスで繰り広げられている歴史理解をめぐる論争について考察した。この論争の重要なトピックのひとつが、Wilfred Owen をはじめとする一部の反戦的戦争詩人たちが大戦の記憶に与えた影響である。戦争詩人が歴史の真実を歪曲したという主張と、戦争詩人こそが歴史の真実を描き出したという主張が衝突している。本研究は、歴史の真実をめぐるこの論争に直接参加するのではなく、一詩人であった Wilfred Owen が歴史の流れの中で普遍化し、第一次大戦のみならずイラクやアフガニスタンなどの現代戦争の表象にまで強烈な影響をもつ言語パラダイムと化している様子を明らかにした。さらに現代イギリスにおける戦争詩の時代を超えた影響力を示す例として、Cameron 首相と戦争詩人の関係について考察した。首相の言説が、Owen の反戦詩から Brooke の愛国詩へと傾いていく現象を確認し、この傾向が、今後のイギリスにおける大戦の記憶の行方の重要な予徴としてとらえることができることを指摘した。(5. 主な発表論文等の〔雑誌論文〕(1)、〔学会発表〕(2)を参照)

(4) 第一次大戦の激戦地として有名なベルギーのイーペルにおける大戦の記憶のあり方について考察した。具体的には、イーペルを

代表するモニュメントであるメニン・ゲートで、1928 年以来毎晩行われている追悼儀式について、現地取材を含めて分析した。儀式では、参加者全員が声をそろえて ' We will remember them ' という言葉を発し、1 分間の黙祷をする。この一文はもともとイギリスの詩人 Laurence Binyon の詩 ' For the Fallen ' (1914) の一部である。この一文が本来のコンテクストから離れ、毎晩反復される時、 ' we ' と ' them ' はいったい誰を指し、メニン・ゲートという記憶の場ではいったい何が記憶されることになるのか。この問題について、メニン・ゲートの追悼儀式を運営する「ラスト・ポスト」協会が、時代の流れとともに意識的に「我々」と「彼ら」の定義を拡大し、記憶の普遍的共同体を目指す様子を明らかにした。だが普遍的・均質的共同体の形成の過程は、同時に、大戦の記憶の多様性と差異の消去の過程にもなり得る。共同体形成が抱えるこの問題について、酒井直樹の「共感の共同体」論を援用しながら考察し、記憶の場において我々が自覚すべき自己批判的姿勢の重要性について、いくつかの歴史的事例とその教訓を参照しながら、指摘した。(5. 主な発表論文等の〔雑誌論文〕(2)、〔学会発表〕(1)を参照)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

- (1) 霜島慶邦、「記憶の継承、歴史の教育、詩の功罪—第一次世界大戦 100 周年と戦争詩人」、『ポストコロナル・フォーメーションズ X』、2015 年 6 月発刊予定、査読無。
- (2) 霜島慶邦、「三万回の「ラスト・ポスト」へ向かって—メニン・ゲートと第一次世界大戦の記憶」、『年報カルチュラル・スタディーズ』Vol.3、2015 年 6 月 22 日発刊予定、査読無(依頼論文)。
- (3) 霜島慶邦、「「第一次世界大戦世代」不在の時代に—Carol Ann Duffy, 'Last Post' と傷の記憶 / 記憶の傷」、『英文学研究』No.90、2013 年、pp.1-18、査読有。
- (4) 霜島慶邦、「最後のトミー、すべてのトミー—Harry Patch, The Last Fighting Tommy と第一次世界大戦の記憶」、『英文学研究 支部統合号』Vol.V、pp.61-70、2013 年、査読有。

〔学会発表〕(計 3 件)

- (1) 霜島慶邦、「戦跡をめぐる、記憶をめぐる—ベルギーのイーペルと大戦 100 周年」、第 5 回カルチュラル・トラジェクトリー、2015 年 2 月 21 日、大阪大学(大阪府豊中市)、ゲスト・スピーチ。
- (2) 霜島慶邦・新関芳生・出口菜摘・山本裕子、シンポジウム「第一次世界大戦開戦 100 周年」、担当発表:「記憶の継承、歴史の教育、詩の功罪—大戦 100 周年と戦争詩人」、日本

英文学会関西支部第9回大会、2014年12月21日、立命館大学（京都府北区）。

(3) 霜鳥慶邦・高橋章雄・有為楠泉・加藤洋介、シンポジウム「第一次世界大戦の記憶におけるロレンスの位置」、担当発表：「第一次世界大戦の記憶とロレンス」、日本ロレンス協会第45回大会、2014年6月8日、相模女子大学（神奈川県相模原市）。

〔図書〕(計1件)

(1) 霜鳥慶邦・木谷徹・小川公代・高村峰生・生駒久美、『文学理論をひらく』、北樹出版、2014年、総208頁、担当134-151頁。

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

特になし。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

霜鳥 慶邦 (SHIMOTORI Yoshikuni)

大阪大学・言語文化研究科・准教授

研究者番号：10400582